

日銀の視点

2020年の幕が開けた。毎年、年始は学生スポーツをテレビで観戦することが楽しみの一つである。サッカーはもちろん、昨年のW杯の興奮冷めやらぬラグビーでは大学選手権や高校生の全国大会が例年以上の盛り上がりを見せているように感じた。その中で個人的にひときわ注目していたのが箱根駅伝である。理由は本県の筑波大学が26年ぶりに出場したこと。いつも以上に応援に力が入った。結果

島田 康隆
経済地域調査課長

は最下位に終わったが、選手たちは沿道の声援を励みに、力を出し切ったのではないかと。その頑張りには地元にも明るく前向きな話題をもたらした。夢の舞台を駆け抜けたという自信と無念の結果に終わ

ったという悔しさを胸に、また一段と大きくなって箱根の舞台に戻ってやることを期待したい。

「明るく前向きと言えば日本銀行では昨年12月、「地域における人材の確保・育成に向

けた企業等の取り組み」というレポートを公表した。近年は人手不足の強い状態が続く中で、人材の確保が難しくなっているという声をよく耳にする。そこでレポートでは全国約1800先の企業など

人材は大事な経営資源

ントを毎年開催している。一見、採用とは無関係のように思われるが、そうした交流を通じて自社のファンとなつてもらい、将来的な採用につなげていくという狙いがあるそうだ。この企業からは、就活

サイトには頼らなくても会社に愛着を持った学生から応募が多いという話が聞かれている。また、ある運送会社は免許を持たない人を採用し、社内で育成していくことにしたそうである。最近ではプロ野球でも育成出身の選手が大活躍しているが、企業でも即戦力で

への聞き取り調査を基に、さまざまな企業の成功事例や前向きな事例を数多く取り上げることにした。

「ここでは具体的な例を二つ紹介したい。ある企業では小中学生などを対象としたイベ

はなく、可能性ある人材を採用し育成していく動きがみられる。会社として育成に熱心に取り組むことで離職率が低下したという声も聞かれている。企業にとって人材は、中

長期的な事業の存続や成長に影響する大事な経営資源の一つ。レポートで紹介したひとつとした工夫や地道な取り組みが人手不足に悩む企業の参考となれば幸いである。

今年もこの「日銀の視点」では金融経済の話題を中心に、できるだけ地域にとって明るく前向きな内容を取り上げていきたいと思っている。

(第2土曜日掲載)